

ばならない。視聴覚教育における「生徒の主体的学習」という場合、次の2つの場面が考えられる。

①主として器材の管理的場面

できるだけ多くの人が視聴覚器材が使えるようになれば利用度はそれだけ増大する。生徒の中にも視聴覚委員のような器材を扱える者を養成するのである。この種の試みはすでにかなり広く行なわれているようである。

②学習活動そのものに関する場面

資料提示というものが生徒にとってはあくまで受身的であったのに対して、こんどはその資料を作させるのである。レポート、演習など発表の方法という場面で利用させるのである。

国語の文学教育などという領域はそういうものともっとも縁遠いもののように思われるが、それでも利用し得るようだ。文学教育においては最近形象（イメージ）による理解ということがよく言われる。そこに着眼すれば、教師の形象化→生徒自身の形象化、形象が理解を助ける→理解を形象化する、主体的形象化の作業を通して理解を深化、確認する、そういうことも可能なはずである。

3. 視聴覚機器がより有効に使われるためには

どの学校のどの教室にも黒板があり、チョークはある。そしてそれらの使い方は誰でも知っている。だから、いつでも、どこでも、誰でも使える。そういうことから考えると、視聴覚機器がほんとうに生き生きと使われるためには、それらが現在の黒板とチョークのようにみんなが無感覚になるほど豊富に、操作が簡単になるしかないのではないか。乱暴な言い方のようであるが、珍らしがられる状態では、壊すのではないかというような不安があるような状態ではまだまだである。集中か、分散かというような従来の管理に関する観念は乗り越えられねばならない。

V 予算からみた教育方法の現代化

松本青也・米田閨一

電子工業長期展望委員会が国内110人、国外60人（米国55人、英國5人）の専門家を対象に行なったアンケートの結果では「コンピューター・データ通信による広域同時教育で全国どこの学校、職場でも高度の教育が受けられ、しかも各人の能力に応じた個別教育が可能になる」年として1978年を予測した人が一番多いが、文部省がその同じ1978年までに設置する計画で予算を出している第1表の品目や数量（31学級以上の

学校でもOHP1台、VTRは無し）を眺めて、彼等の予測がどうにも現実離れしたもののように思われるトスれば、それは近い将来すみずみまで普及するであろう「教育の現代化」というものにあまり多くのものを期待しすぎているからではないだろうか。

なるほど全国のいくつかの学校では既に何百万円という最新の教育機器を備え始めはしたが、それはあくまでも指導方法の改善に役立つ研究を行なう為であって、やがてすべての学校にそうした機器が完備する兆しでは決してないのだ。

例えば愛知県の場合、研究指定校には45年度540万円の予算でLLを1校に、集団学習反応記録装置を5校に設置しているが、県下100校からの強い要求にもかかわらず、ありふれた機器、例えば16ミリは7校に、OHP、VTRはそれぞれ11校に備えられるよう、計5百万円の予算を組んでいるにすぎない。と同時に見逃してならないのは45年9月から始まったFM愛知の電波を使っての教育放送である。これは毎日30分、初年度7ヶ月で約900万円しかかからず、新しい高価な機器が実際のところ何校でどれ位の時間使われているかを考え合わせてみると実に経済的で、行政当局が各校にその利用について適当な指導を加えれば非常に効果的で影響の大きい教育方法なのである。

結局日本における教育方法の現代化とは教育現場のすみずみにまで新しい高価な教育機器が普及することではなく、特定少数の学校で行なわれた研究の成果が行政当局の専門家集団に集約され、そこからソフトウェアとか教育放送という形で現場に流されるという、いわばその流れの方の現代化ということにすぎないのではないだろうか。だとすれば直接的に流れてきたものにある意味でお株をうばわれてしまう現場の教師と、そうすることで安上がりに思い通りの教育ができる行政当局との間にさまざまな問題が生じてくるであろうが、ここで興味深いのは西ドイツとイタリアの例である。ヨーロッパの中で西ドイツほど教育放送に対して冷たい態度をとってきた国は無く、イタリアほど教育放送を学校教育に役立てた国は無いという。西ドイツは戦前ナチズムの強化に利用された中央集権的な放送と教育体制への反省から、イタリアは200万人に及ぶ文盲や中等教育の遅れ、更には深刻な教師不足を解決してくれるものとしてそうした考え方をしているのだ。

やがて、かなり期待はずれの形ではあっても、ともかく「コンピューター・データ通信による広域同時教育で全国どこの学校、職場でも高度の教育が受けられ、しかも各人の能力に応じた個別教育」が、しかも全く新しい教育組織の中で行なわれ始める前に、この「現代化」の意味するものを各々の現場でもう少し具

教育方法の現代化

体的なイメージとしてとらえ、その功罪をじっくり考

えてみなくてはならない。

表1：視聴覚教材整備基準

小学校：

品目種別	5以下 学級	6学級 12	13学級 18	19学級 24	25学級 30	31以上 学級
	下級	上級	下級	中級	上級	上級
紙芝居舞台	1	1	2	2	3	3
スライド映写機	1	2	3	3	4	4
8mm 映写機	1	1	1	1	1	1
8mm 撮影機	1	1	1	1	1	1
16mm 映写機	1	1	1	1	1	1
オーバーヘッドライト	1	1	1	1	1	1
実物幻灯機	1	1	1	1	1	1
映写幕	2	3	4	4	5	5
ポータブル電蓄	1	2	2	3	4	4
録音機	2	3	4	5	6	6
テレビ受像機(親)	1	1	1	1	1	1
テレビ受像機(子)	1	1	2	3	4	5
携帯用拡声機	1	2	3	3	4	4
カメラ	1	1	1	1	1	1
ラジオ受信機	5	12	18	24	30	36
放送設備一式	1	1	1	1	1	1
スライド	150	150	150	150	150	150
レコード	60	60	60	60	60	60

中学校：

品目種別	5以下 学級	6学級 9	10学級 15	16学級 21	22学級 27	28以上 学級
	下級	上級	下級	中級	上級	上級
スライド映写機	1	2	3	3	4	4
8mm 映写機	1	1	1	1	1	1
8mm 撮影機	1	1	1	1	1	1
16mm 映写機		1	1	1	1	1
オーバーヘッドライト	1	1	1	1	1	1
プロジェクター		1	1	1	1	1
实物幻灯機		1	1	1	1	1
映写幕	2	3	4	4	5	5
録音機	2	3	4	5	6	6
ポータブル電蓄	1	2	2	3	4	4
テレビ受像機(親)	1	1	1	1	1	1
テレビ受像機(子)	1	2	4	6	8	10
携帯用拡声機	2	3	3	3	4	4
カメラ	1	1	1	1	1	1
ラジオ受信機	5	9	15	21	27	33
放送設備一式	1	1	1	1	1	1
スライド	170 (組)	170 (組)	170 (組)	170 (組)	170 (組)	170 (組)
レコード	170	170	310	310	335	335

VI 視聴覚教育と入試

杉浦 晴彦

視聴覚教育の発展を妨げている今一つの原因として、受験勉強体制との対立という深刻なものが考えられる。様々な視聴覚教育機材を使って面白く分りやすい授業展開をしようとしても果して教科書に盛られた内容を全部時間内に消化できるであろうかという「不安」を教師も生徒も持つのである。この「不安」は云うまでもなく「受験」に対する不安なのである。現在の授業内容は何らかの形で入試問題にひきずられているのが実状であるからである。特にいわゆる進学校や進学クラスにおいてはいちじるしいものがある。入試をめざすには視聴覚教育機材を駆使した、面白く丁寧な分りやすい授業展開をすることは「ムダ」があまりにも多いことになってしまう。むずかしくても、面白くなくても入試問題直結の授業展開をした方が無難で不安はなくより現実にマッチしたものになるのである。もちろんこのことは視聴覚教育機材を使った分りやすい授業を必要とする多数の生徒が犠牲になっている

ことは云うまでもない。LLを導入したある高等学校では教師自身が従来の受験英語を反省し、眞の英語教育の実践をLLを通じて行なおうとしたら生徒の方からLLよりも問題集をやってくれと云われてしまったという現実が何よりもこの悩みの深刻さを物語っているように思われる。

いわゆる進学校や進学クラスは視聴覚教育に対してあまり熱心ではないということが一般にいわれているが、これらの学校やクラスで視聴覚教育がおぎなりにされている理由（原因）を今一度考えてみると

1. 教科の内容を十分に消化出来ないという不安、即ち「時間のむだ」といったもの。
2. 現在の入試問題は特に視聴覚教育機材を使わなければ解けないという問題ではないということ、即ち黒板とチョークそして問題集で十分であるという入試問題。
3. 準備の手数・時間（教師の負担）、機器教材等の不備、機器に対する教師の無知など。
4. 現在の入試体制に対する教師の意識、そして生徒・父兄の意識（基本・原理などはとにかく、要